

援助の授受経験と互惠性規範が 今後の援助の授受に与える影響について

○岡村泰佑・稲月聡子
(岡山大学大学院社会文化科学研究科)

研究の目的

橋本(2015)は互惠的な状態を好ましいと見なす規範(互惠性規範)に従い、相手に十分な返報を行えないことを予期すると援助要請が抑制されることを報告している。

しかし、我々は日常的に、援助要請者と援助提供者の両方の立場を経験しているにも関わらず、援助提供者が負うコストを正確に知覚することはできない(竹ヶ原・安保, 2017)。すなわち、援助提供者のコストを過剰に高く見積もることで、互惠性規範に従って援助要請が抑制される可能性があるのではないかという仮説を検討した。

方法

調査参加者 大学生・大学院生 106名(男性 25名, 女性 79名, 未回答 2名, 平均 20.4歳, $SD=1.2$)から回答を得た。

質問項目 (a)互惠的提供規範尺度と(b)互惠的受領規範尺度は、橋本(2015)を踏襲し、心理負債感尺度(相川・吉森, 1995)を改変したものである。(c)援助要請時の利益・コストの予期尺度と(d)援助提供時の利益・コストの予期尺度は永井・鈴木(2018)と Flynn & Lake(2008)から 21項目を選定し、改変したものである。(a)と(b), (c)と(d)は対応する質問文の「私」と「その人(身近な友人)」が入れ替わっている。(e)援助の授受経験と今後の意欲では、大学生の主要な悩み(木村・水野, 2004)を取り上げ、それらの援助要請経験、援助提供経験、今後の援助要請・提供意図を尋ねた。また、返報

の程度についても評価、予想してもらった。

結果と考察

援助要請と援助提供の立場の違いによる各得点の差を検討した。互惠的提供規範と互惠的受領規範について Wilcoxon の符号付順位検定を行ったところ、互惠的提供規範得点($M = 4.27, SD = 0.70$)の方が互惠的受領規範得点($M = 3.46, SD = 0.78$)よりも有意に高いことが示された($Z = 8.32, p < .001, r = .95$)。互惠的という言葉とは裏腹に人々は提供を与えようとする意識の方が強いことが示唆された。

各尺度得点を基に、援助要請意図及び援助提供意図に影響を与える要因を検討するため共分散構造分析を実施した(Figure1)ところ、援助提供において互惠的受領規範が間接的に援助提供意図に正の影響を与えていることが示唆された。また、返報を受ける経験も、返報を受ける予測を高め、援助提供意図に正の影響を与えるという結果が得られた。援助を提供することによって相応の見返りが得られると、今後の援助提供意図が促進されると思われる。一方で、援助要請時には互惠性規範や、返報の経験や予測が援助要請意図に与える影響について有意な結果は得られず、相手との実際の援助のやり取りや、援助要請を通して関係性が深まることへの期待が正の影響を与えていることがわかった。したがって、日ごろから他者と協力しあう関係性を築いておくことが、援助要請の促進に重要であると考えられる。

Figure1 各項目が援助要請・提供意図に与える影響

